白銀の鎧と黄金の剣

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の鎧と黄金の剣

【Ｎコード】

Ｎ３４８３Ｙ

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

主人公がヒロインと出会い、そこからさまざまな事件に巻き込まれる話です。色々な神話や伝説の武器やらが登場します。楽しんでもらえれば幸いです。

プロローグ（前書き）

どこかパクリ臭のような物がしても、どうか気にせずに読んでください。

プロローグ

神話――――――それは様々な神や英雄などが生き、そして散って行った世界。

その力は人間界に生きるあらゆる生物にちりばめられた。その力は様々な者によってふるわれた。だが、その力を持つ者は人間だけではなかった。

馬や狼などの生物もその力を持った。だが、その多くはある理由により死んでいった。それは――暴走だ。そもそも、この力は神などの上位種がふるっていたものだ。それを生物がふるうのはおこがましいという事なのだろうか？

それを見かねたある男はとある組織を作り上げた。

その組織の名前は『神にはむかう者達』≪フェンリル≫

プロローグ（後書き）

初めて書いた作品ですので、どんどん問題点等を教えてもらえるなら幸いです。
これから、いろいろとよろしくお願いします！

世界は始まりを奏でる（前書き）

取り敢えず始めてみました。プロローグは意味不明かもしれませんが、どうかご容赦ください。

世界は始まりを奏でる

ある陽気な日に仕事場をのぞいてみると、支部長に呼ばれているということなので俺こと、乾慎也は通路を歩いていた。

≪神にはむかう者達≫（ここからはフェンリルとする）は、本来各地で勃発する犯罪とかに駆り出されている。ま、ぶっちゃけ警察の裏組織的な？そんな感じだ。

だから支部長に呼ばれるなんてことはめったにない。仕事をさぼっていない限りは。

コンコン――――

「乾です。支部長、入室してもよろしいですか？」

「構わんよ。早く入りたまえ」

自分で呼び出して、何言ってんだ？あの爺は。もう年なんだから退職なりなんなりすりゃいいのに。もちろんそんなこと一切口には出さなかったが

「失礼します。それで支部長、どんな……御用……でしょう…か…？」

後半とぎれとぎれになったのは、綺麗で可愛らしい女性がソファに座っていたからだ。あれ？おかしいな。幻？そんなわけないか。紅茶飲んでるし。その女性の髪は黒色だが、その眼の色は黒ではなく、金色だった。ハーフってやつかな？

「支部長。娘さん……いや、お孫さんですか？」

それならまだぎりぎりわかる。というか、それ以外に何があるんだ？

「何故そこで依頼者という考えが出んのだ？孫が来ておるなら、おぬしなんぞ呼ばんわ」

「やかましいぞ、クソ爺。文句があるなら、俺はほかの任務を受けるだけだからな」

うわ、しまった。つい癖でいつもの調子が出てしまった。俺が呼び出されるときは、たいてい普通の話し合いにならない。なんせ位の違いなんぞ関係なしで悪態つくからな。俺が女性の方に視線を向けてみると、顔をそむけて笑いを堪えていた。そんなに面白いか？

「真由美君、そんなに笑わんでもいいじゃろうに。わし、今すごく傷ついとるぞ」

「申し訳ありません。あまりに二人のやり取りが自然すぎて。……くっ」

まだ笑ってるよ。さすがに受けすぎじゃねえ？

「爺、あんたに繊細な心なんかあるわけないだろ。ついこの間呼ばれたときだって、あんた確かギャルゲ……」

「あー、あー聞こえない聞こえない。何のことかわしゃ知らんぞ」

ナチュラルに否定しやがったよ、この爺。ま、そりゃどうでもいいんだが。それよりも大切なことがあるしな。

「それで？俺に依頼って何なんだよ。別に俺じゃなくたって頼める

やつはいくらでもいるだろ？」

俺は支部長の隣のイスに座りつつ訊いた。

「おお、良く訊いてくれた。だが、その前に自己紹介といこう。乾。こちらの女性は組織のとある役職に就いている、神崎真由美君だ。

真由美君。このいけすかない男は、組織でもSランカーの腕利きの男じゃ。安心してくれ」

「そうですか。それでは改めてはじめまして、神崎真由美と申します」

「こちらこそはじめまして。乾慎也です。どんな依頼にしろ、よろしくお願いします」

「あら、受けないという選択肢はないんですね。期待できそうです」

「どんな物であれ、とにかくやり抜く。それが俺のポリシーですので。それで爺、依頼って何なんだ？そんな風に固まってないで教えてくれよ」

爺はなんかしらんがソファで丸まっていた。気持ち悪っ。

「こほん。依頼というのは、彼女、真由美君の警護をしてほしい、という事なんじゃ」

「は？」

おおっと、何か分からんが不吉な空気が漂ってきたな。どうしようかな？

世界は始まりを奏でる（後書き）

第二話、出してみました。今のところ読まれておられる方はいらっしゃらないようですが、頑張りたいのでよろしくお願いします！

護衛の始まり（前書き）

第三話です。できるだけ定期更新しようと思いますが、用事でできなくてもご容赦ください。

護衛の始まり

「仕方ないな。俺は別にかまわないよ。でも、まさか俺だけにやらせるわけじゃないよね？」
「当たり前じゃろ。いつもの二人を連れていけ。あれでも一応はＡ（ダブ）Ａ（ルエー）ランカーじゃ。役には立つじゃろ」

それはもうあっさりと承諾した。正直な話、たかが護衛でＡＡランカー以上を三人も必要とする任務。一体どれだけ危険なのか、気になるという点もあったがそれよりも重要なのは――――

「特務なんだろ？これは」
「支部長直々なんじゃからそうじゃろ。そんなこと訊かんでもわかっていると思っとったんじゃが」

特務――――要するに支部長、または本部から直々に送られてきた任務のことを指す。一応ここは日本支部。一応というのは、本部という物がぶっちゃけ存在しないからだ。総局長が滞在している場所が、その時々の総本部になる。いったい今はどこにいるのやら。

「それじゃあ、行くとしようか。準備はいいですか？」
「ええ、私は構いませんが……いいのですか？そんなに軽々しく受けてしまって」
「そんなこと気にしなくても大丈夫ですよ。こんなクソ爺からとはいえ、一応特務ですから。受けないわけにはいきません」
「そうですか……。まあ、貴方がそれでいいのならいいんですが」

なんか遠慮気味だな。彼女が依頼を持ってきたんじゃないのか？それとも、彼女が何か重要な役割を担っているのかな？まあ、それ

は置いといて。仕事をするとするか。

俺と神崎さんは支部長室を退出した後、任務の話をしていた。どうやら彼女を隣町のホテルまで護衛する、という任務のようだ。思ったよりたいした任務じゃないないな。でも、それなら特務指定にされるわけがないし……まあ、いいか。悩むとか面倒だしな。俺は神崎さんを待合室に待たせて、受付に向かった。

「花音ちゃん。ちょっといいかな？」

「はい～？あ、慎也さんじゃないですか。どうかしたんですか？」

この子は達宮花音（たつみや・かのん）ちゃん。フェンリルで受付嬢をやってる元気な女の子だ。髪は明るい橙色。受付嬢というよりは、外で元気で遊んでいた方が似合っている女の子だ。基本的に任務の発注などをやっている。

「あの二人組の馬鹿がどこにいるか知ってる？ちょっと任務に連れて行きたいんだけど」

「ああ、それでしたら先ほどお見えになるって――――」

「誰が二人組の馬鹿だって？」

声のした方向を振り向くと、そこには男女二人が立っていた。俺が探していたやつらだ。

「お前らのことだ。っていうか、お前ら遅刻だぞ。もうすぐ昼時だぞ。また仲睦まじくやってて遅くれたのか？」

「ちげえよ。今任務が終わって帰ってきたところなんだよ。それで？俺らに何か用なのか？」

「そうだと言ってるだろう。月花、なんかやけに眠そうだな。またなんかしてたのか？」

「違うわよ！ただ恥ずかしいから顔を伏せてただけ！どうしてリーダーはいつも私たちをそういう目で見るわけ！？」
「そういう風に見えるからに決まってるだろ？ところでお前ら、任務だぞ。昼食を奢ってやるから手伝え」
「マジで！？行く行く！いやあ、腹減ってたんだよな。旨い店を頼むぜ？」
「食い意地張り過ぎよ、卓也。まあ、おなか減ってたのは本当だけどね」

この二人は俺が組んでるチームの二人、六道卓也（ろくどうたくや）と黒市月花（くろいちげっか）だ。一応ＡＡランカーだ。
ランカーの位は、Ｆを順当にＥ・Ｄ・Ｃ・Ｂ・ＢＢ・ＢＢＢと順番に増えていく。もちろんＣからはプラスとマイナス判定も付く。まあ、Ｆから始まる輩で続くやつは少ない。
Ｆの地位はいわゆるなんでも屋みたいな雑事ばかり任せられる。そこで俺たちが守るべき市民の事を知るという意味も含まれているからだ。俺はそのＦランクから始まった数少ない逸材なんだけど、ね。

「それじゃあ、護衛の相手を連れてくるから。車をとってくる間守っててくれよ？」
「え？任務って護衛なの？」
「ああ、それじゃあ迎えに行ってくるわ」

俺が待合室にいくと神崎さんは何かの本を読んでいた。あれはイギリス英語で書いてあるから、イギリスの本かな？さすがに内容とかはわからんけどさ。

「神崎さん、人の用意はできたんですが動けますか？」
「あ、乾さん。はい、大丈夫ですよ。それでその人は？」

「移動ついでに自己紹介させますので、付いてきてもらっていいですか？」
「そうですね。お願いします」

俺と神崎さんは、ホールに出て入口の所で待っていた二人のところまでいった。案の定二人はきっちりとした感じになっていた。いつもはふざけているが、仕事はまじめに取り組む奴らだからね。

「それじゃ、俺は自分の車をとってくるんでここで待っててもらえますか？護衛はこの二人に任せるので」
「それは構いませんが。大丈夫なんでしょうか？」
「？……ああ、車の事ですか？それなら大丈夫ですよ。一応狙われても大丈夫なようにコーティングはしてありますから」
「わかりました。それではここで待っているとします。それでは護衛、お願いしますね」
「はい。ちゃんと守り抜いて見せますよ。だからできるだけ早く戻ってきて」
「はいはい。まったく、台無しだな」

俺は車を取りに駐車場の方に向かって歩き始めた。

護衛の始まり（後書き）

いきなりお気に入りにしていただいた方もいるようで驚きです。その期待に頑張ってこたえようと思います。それでは、また明日。

力の片鱗

俺が駐車場に到着すると、そこには一般人の格好をしているがその実力は少なくとも、Bランク以上の実力はあるだろうという気配を漂わす奴らが十人以上いた。その中の最も強い気配を放っていた男がこちらに向けて歩いてきた。

「先に訊いておきたいことがある。お前はあの女とどういう関係なんだ？」

「どういう関係ってなんだよ。俺と彼女はただの護衛と護衛対象ってだけだ。それより、あんたらも同業者だろう？何故彼女を狙う？いくら認可されているとはいえ、一応罪にはなるんだぞ？」

「こちらも依頼なのでな。仕方がないのだよ」

「そうかい。こんな大量の人員を雇えるってことは相当の金持ちだな」

俺達の会話をしり目に、ほとんどの奴らは俺を囲んでいた。そしてナイフや銃をこちらに向けて構えている。俺がそれを分かっているだろうに動かないでなおも喋っているのがじれったくなったのか、一人の男が俺に向かってきた。それに釣られて十人近くの人間が動き出した。

「やめろ！勝手に動くんじゃない！」

リーダー格の男はがそう叫ぶと、全員の動きがぴたりと止まった。いい統率力だ。だけど、それはやっちゃいけない選択だったよ。俺は片足を思いっきり上げ、思いっきり地面に叩きつけた。

叩きつけた足で地面を揺らしそこにいた奴らを行動不能にした。そしてその足で動いた十人を包み込む程の魔法陣を展開し、その陣

に魔力をつぎ込んだ。揺れが問題ないほどになる頃には、もう術は完成した。

「――――重力術二式（グラビティセカンド）・輪環（フォーチュン）――――」

その陣から発生した普段人間が浴びている重力の約二十倍もの重力をたたきつけた。もちろんそんな物を浴びた連中は十秒と持たず肉塊、いや肉片も残らず消えた。まだ生き残っているのはリーダー格の男と、四人だけだった。

「……さすがは護衛を任されただけの事はあるな」

「お褒めに預かりどうも。でももったいないことをしたね。俺に挑むなんて愚を犯さなきゃ、まだ生き残っていられただろうに」

「そのようだな。さすがにこれは引かざるを得ないようだな。最後に教えてくれ。君は一体何なんだ？」

「へえ、さすがだね。あれが見えたんだ。いいよ。教えてあげよう。あれはな――――」

――――神喰狼（フェンリル）だよ――――

俺がそう告げると、男たちは顔色を変えた。俺はそれを無視して、自分の車のところに行きエンジンを動かした。そして俺が男の隣を通り過ぎようとしたところで、男はぼそりと呟いた。

「その力は、いつか君すらも喰らうことになるだろう」

「それぐらいこの力を受け継いだ時から覚悟しているさ」

俺はそのまま車を動かし、駐車場から出て行った。

力の片鱗（後書き）

第四話です。昨日は更新できず、すいません。それでは、またいずれ。

車の中で

「ほい、到着っと」
「リーダー、車取りに行くだけでこれは時間かかり過ぎですよ」
俺が入口の所に車を置くと、早速文句を言われた。時計を見ると――――うわ、十五分も経ってんじゃん。確かにこりゃ時間かかり過ぎだ。
「まあいいじゃん。どうせ襲われてたんだろ？なんか地面の揺れを感じたし、震脚でも使ったんじゃねえの？」
「まあね。大した実力はなかったけどね。どこかのチームを雇っただけで、実力は測ってなかったんだろうけど。弱かったよ。術でほとんどが一撃死。拍子抜けだった」
説明していなかったが、フェンリルというのはギルドみたいなもので雇われればなんでもするなんでも屋だ。雑務から探検、暗殺などなんでもござれ。だけど、護衛なんて物を任されるのは大体特務だけなんだけど。普通護衛なんて物を頼む奴には専用のＳＰがいるからね。
「いや、すいません。待たせちゃいましたね。どうぞお乗りください」
俺が助手席の扉を開いて神崎さんに手をのばすと、神崎さんはカバンの中をあさっていた。
？何を探してるんだろ？少しを待っていると、出した物はハンカチだった。ハンカチ？何故に？そう思っていると、神崎さんはそのハンカチを俺の頬にあてた。

「あの？何かありました？」
「リーダー、血が付いてたんだよ。それで怪我したんじゃないかと思ってるんじゃない？」
「え？違うんですか？」
「違いますよ。この血は返り血です。俺に怪我を負わせることなんて、そうそうできませんから」
「うわ、傲慢。でもそんなところが痺れる！」
「はっはっは。褒めるな。まあ、どうでもいいんだけど。まあ、その、ありがとうございます」
「いえ、これ位どうということはありませんから」
「リーダー、そろそろ行こうぜ。俺腹減っちまってさ」
「お前、いろんな意味で台無しにしてくれるよな。構わないけどさ。それじゃあ、乗って下さい」

俺は運転席、神崎さんは助手席。それに残り二人は後部座席に座った。俺の車はワゴン車だ。説明し忘れたから言っておく。そして車は動き始めた。

「そういえば、この車対策とか大丈夫なんですか？」
「何がですか？……ああ、狙われないかってことですか？それなら大丈夫です。この車は幻影色（ミラージュカラー）ですから。それに対魔法・魔術の素材でもできてますし」
「幻影色（ミラージュカラー）……ですか？」
「あれ、知りません？そんな有名じゃないのかな？
双眼鏡とかそういう媒体を使って見ても、こちらの事はわからないようにする物です。大体の人間は常識を持っていますから、人が多くいるような場所で撃ってきたりはしません。
まあ、撃ってきても俺の重力操作で捻じ曲げますがね」
「リーダーって、ホントに容赦ないからね。どうせ駐車場で戦った

相手だって重力で押し潰したんでしょ？」
「だっていちいち相手にするの面倒だし。大体知ってるだろ？俺は光と闇の術式以外が苦手だって」
「知ってるけどさ。なんか無残じゃない？」
「そんなもん知るか。挑んでくるんだから相対するしかないだろ？全く話は変わりますが神崎さん」
「はい？何でしょうか？」
「後ろの二人が腹が減ったとうるさいので、目的地に行く前に俺の行きつけの店で昼食をとってもいいですか？」
「はい、それぐらいなら構いません。私もお腹は空いていますし、ね」

返答を訊いた俺は、俺の行きつけの店『カナリヤの涙』に向かった。

車の中で（後書き）

第五話です。主人公ちょっと傲慢ですけど、飽きっぽいです。どうでもいい情報ですが。それではまた今度会いましょう。バイチャ！

（＞＿＜）／

カナリヤの涙

俺たちは『カナリヤの涙』に到着した。『カナリヤの涙』は隣町との境にある、小さい店だ。俺は駐車場に向かって、車を止めて助手席を開けようとした時にそれは飛んできた。光の槍が。とっさに闇の術を手に展開し受け止めた。その方向をみると、先程のリーダー格の男が立っていた。同時に後部座席の二人も降りて、助手席を開けた。いくら対魔術に優れているといっても限度がある。避難させた方がいいと判断したんだろう。だけど、神崎さんは動こうとしなかった。まるでこれから始まる戦いを片時も見逃さないようにしているかのように。構わないんだけどさ、無鉄砲な人だ。

「面倒だな。なあ、まだ追いかけてきたのか？もう無駄だと悟っているだろうに」

「無理だと理解はできても、諦める訳にはいかないんだよ。しっかし、それだけの光を片手で止めるのか……。やっぱり化け物だな」

「当り前……と言いたいところだが、これは神喰狼（フェンリル）の力は関係ない。単純に闇の術式で光槍の表面を削ってるだけだ」

「そんなことをさも当然にやってのけるところが、すでにあり得ないって……」

「俺の前に出てきた、って事は死ぬ覚悟はできているな？お前には特別に見せてやろう。主神を喰らった神狼の力をな」

俺は腕を交差させながら呟き始めた。神狼は今ここに顕現される。俺の右手に刻まれた十字架の刻印が輝き始めた。白銀の色に。

「フェンリル、久しぶりにお前も戦えそうだぞ？暇つぶしぐらいになるんじゃないか？」

『それは楽しそうだ。ここ最近の敵は暇つぶしにもなりはしなかっ

たからな。せいぜい期待を裏切るなよ？人間』

交差の手をほどくと、白銀の光は頂点に達し光が消えると宝石の結晶が俺を包み、次の瞬間には俺の体を白銀の鎧が包み込んだ。そう気高き孤高の狼の毛皮を纏ったかのように。

「それがフェンリルか。予想外だよ。結構普通なんだな」

「ははは。まあ、見た目はな。だけど、伊達に神狼と呼ばれてるわけじゃないんだぜ？」

俺は一気に動き始めた。俺の右手の刻印の正体はグレイプニール。北欧神話において、フェンリルを縛っていた魔法の紐だ。ある意味で、こいつは対神用の生物だ。その身体能力は尋常じゃない。少なくとも眼で追うなんて不可能なほどに。ま、フルパワーには程遠いんだけど。

――――ゴウッ！！！

俺の拳は顔面を狙っていた。それにぎりぎりで気がついたのか、横に避けるとものすごい音が鳴り響いた。空気を殴ったことで、拳の威力は衝撃波になって周りに散らばった。

「外したか。やっぱ四分の一の出力じゃ避けられちまうか。ほとんどの奴はこれで十分なんだけどな」

「怖ええよ。なんだその威力。回避した拳の攻撃が衝撃波に変わるとかどんなんだよ！」

「神狼だぞ？それぐらい当然だろ。今度こそ当ててやるから、まあ味わってみろって」

「こらー！店先で何やってんの！ここは戦う場所じゃなくて、ご飯を食べる場所でしょうが！」

もう一度拳を構えて動き出そうとした俺たちに怒声が響き渡った。この声は……オーナーか？

その方向を見てみると、エプロンを構えた女性が腰に腕を添えて立っていた。おお、結構さまになってる。

「慎也！今すぐ戦うのやめないと、昼飯抜きにするよ！」

「うわっ！それは勘弁して下さいよ！」

俺は勢いもなくなったし、しぶしぶ鎧を解いた。相手も拍子抜けしたのか戦う態勢をやめていた。ここに充満していた戦いの雰囲気がなくなった。

「それじゃあ、いらっしゃいませ！『カナリヤの涙』へようこそ！」

そんな俺たちを迎えたのは満面の笑みを浮かべたオーナーの姿だった。

カナリヤの涙（後書き）

そんな訳で第六話です。お気に入り登録も増え、感謝です。これからもよろしくお願いします。それでは、ばいばい。（＞＿＜）／

説教と談笑（1）

「それで？なんでまた店先で暴れてたわけ？」
「いや、俺は率先して暴れたわけじゃねえよ。ただ襲われたから自衛権を行使しただけ。これ以上文句を言う気なら、法律の方に言ってください」

俺は正座の姿勢で詰問されていた。うう。俺は何もしてないのに。というよりも俺のせいじゃないのに。

「お黙りなさい。あんた神喰狼（フェンリル）の力を開放してたでしょうが。知ってる？そういうのを過剰防衛っていうのよ。それとあんた」
「ああ。なんだ？罰ならいくらでも受けるぞ。甘んじてな。俺が悪いのだから」
「あら、結構潔いのね。これは忠告よ。あんた見たところ、ＡＡランカーでしょ？その程度の実力でこいつに挑もうなんて愚の骨頂よ。金輪際こういう事が無いようにしなさい」
「え？何その扱いの違い。俺ひょっとして嫌われてんじゃねえの？」
「あら、そんなことはないわよ？ただあんたと一緒にいると、あんたの事いじめたくなってくるのよね。偶に」
「うわ、ドＳだ。ここにドＳがおるわ」
「失礼ね。ま、いいわ。それで昼は食べて行くんでしょ？さっさと注文してよね。それともいつものでいいの？」
「うん。いつものでいいから、立ってもいいか？そろそろ足が……っていうか、なんだよこの石は！どんな拷問の風景だよ！」

ちなみに神崎さんと卓也と月花はこちらを苦笑しながら見ていた。俺と男の膝には十五枚ほどの板状の石があった。重てええええ！！！

「ああ、もういいわよ。お疲れ様」

オーナーこと、花道楓（はなみちかえで）さんは、俺たちに乗っている石の天辺に触った。すると全ての石が砕けちった。あー、足が痛い。

「それじゃ、料理を用意しとくからおとなしくしときなさい。暴れたら、シバキ倒すからね」

「そんなことしないよ。疲れたから、早めにお願い」

「はいはい」

俺が席に戻ると、早速卓也が話しかけてきた。こいつのテンションに付き合うの、偶にだけど面倒なんだよな。

「リーダー、あの人とどういう関係なんですか？ずいぶん親しげでしたけど！」

「昔から世話になってる人だよ。それ以上もそれ以下もない」

「なんだ。面白くないな」

「お前を喜ばせなきゃならん道理はない。それで神崎さん、こいつの処遇はどうします？」

さっきから黙って座っている男――――――確か、白鷹だったかな？フルネームを公表する気はないみたいだけど。全員の視線が自然とその男に集まった。もっと肩身狭くなったみたいだけど。神崎さんは淡く微笑みながら、白鷹に話しかけた。

「白鷹さん？あなたはこれ以上私たちを襲う意思はありますか？」

「ない。神喰狼（フェンリル）の力は把握した。これ以上挑んだって己の命を捨てるだけだからな」

「それなら構いません。無用の命を捨てる必要はありませんから」

「そうですか。いつもなら甘いと切り捨ててしまうところですが、

依頼主がそういうならいいでしょう。俺は何もしません」
「リーダー、この人の仲間に何の術を使ったんですか？」
「輪環（フォーチュン）だな。全体攻撃用の魔法。重力系統のな」
「重力二式（グラビティセカンド）ですか？そりゃあ、ご愁傷様ですね」
「上下左右から通常の二十倍ほどの重力を叩きつけ、体を微塵も残さずに潰すっつう技だからな。そりゃあ、痛みも半端じゃなかっただろうな」

魔法や神話系統の物が全世界に明らかになって早二十年。２０３８年現在でも、魔法などの技術で新たな素材ができている。
魔法は四系統・炎・水・土・風に加えて、二系統・光と闇つまり六系統で構成されている。俺が得意な術は闇と光の攻撃系の魔法。回復は全くと言っていいほどできない。
フェンリルができて、俺たちのような力を継いだ者は光を見ることができるようになった。俺達は言ってみれば、異能者つまり異常の塊みたいなもんだ。力事態は太古から存在した。だが、たいていの奴は迫害される。当たり前だ。こんな気味の悪い力を持つ奴と一緒にいたいと思う奴がいる訳がない。

「お二人もやっぱり神話武器（ゴッドウエポン）を持ってるんですか？」
「俺たちは持ってません。俺たちの得意武器は、刀と槍なんですけど。職人のオーダーメイド品なんです。材料はわざわざリーダーが取ってきてくれたんですよ？」
「すごいですね。ちなみにその素材って？」
「刀の方は、アジ・ダハーカの牙。槍の方は神話世界にのみ存在する鉱石です」
「……え？」

さてはていったいどんな反応をしてくれるのやら、楽しみだな。

説教と談笑（1）（後書き）

そんなこんなで第七話。今回と次回は、一応説明不足の部分を説明する回にしたいと思います。それでは！

説教と談話（2）

「えええええーーーーっ！アジ・ダハーカってあれでしょう？大洋の底の方に封印されていて、世界の終末に人類の約三分の一を殺す、っていう伝承持ちの竜でしょう？」

おおう。やっぱり凄いリアクションだな。俺は微笑を浮かべながら、ダージリンティーを飲んだ。ここのお茶って美味しいんだよな。そんでサンドイッチを食いながら説明を続けた。

「ええ、そうですよ。あとちょっと訂正で。確かに伝承では海の底か高い山に縛られている、となっています。でも、実際は異世界を泳いでるだけですから」

「でもリーダー。三分の一の人を殺す、なんて伝承を持っている竜と交渉してくるのは世界広しといえども、リーダーと魂持ちの人たちだけだと思うよ」

魂持ち――――――名前の通り、各神話の英雄や神様の魂をその身に宿す人たちの事だ。その人たちは、魂を宿すことでその者が使っていた武器――――――神話武器（ゴッドウエポン）を使う事が出来る。

でも、そうではない人もその力を継ぐことができる。『継承』とか色々あるけど、ほとんどの奴らは因子持ちだ。

その武器をふるうのに必要な因子を持っていれば、誰でもふるう事が出来る。でも、神や英雄の武器だ。そう簡単に振るえる訳がない。そこで開発されたのが伝説武器（ミスティックウエポン）。

「それで、どうやってアジ・ダハーカの牙をもらったんですか？」

「簡単ですよ。俺が生きている間に世界の終末が起こった時、俺はアジ・ダハーカに手を出さない。その代わりに、牙を一本もらう。

そういう契約です」
「アジ・ダハーカも神喰狼（フェンリル）は障害にしかならないだろうしね。ひょっとしたら一人の人間も殺さずにリーダーと出くわして、よくて重傷、悪くて死亡するかもしれないからね」
「それは……そうかもしれませんが。でしたら乾さんは遭遇しても、知らんぷりする、という事なんですね？」
「そうですが。何か問題でもありますか？」
「問題って……」

あれ？ちょっとあっけからんとしすぎたかな？するとさっきから黙りこくっていた白鷹がしゃべり始めた。おお、やっとか。

「それで、神話世界の鉱物とは何なんだ？神話世界に入ることができるのは、相当地位が高い者だけだと聞いていたんだが……」
「俺は創始者の知り合いだからな。そのツテもあるけど俺は一応、神喰狼（フェンリル）だからな。あそこの掟は『すべて自分で対処せよ』だからな」
「そうなのか。というかこの硬度、なんか覚えが……ひょっとしてこれ、オリハルコンか？神話世界でもめったに見つからないっていう、あの？」
「ははは、正解。オリハルコン事態は別に珍しくない。でも、発見されるのはもう焼け野原になった場所がほとんどだ。そういう場所にはいるんだよな。魔獣の類が」
「なるほど。力を制御されている者とは違い、己の力を理解しているから、か。ちょうど銃だけを持った人が虎に挑む感じか？」
「そうそ。それで俺がとある場所で見つけた、ってわけ。それを知りあいの鍛冶屋に持って行って槍にしてもらったってわけ。わかったか？」
「私たちがＡＡランカーになったお祝いって事でくれたんだよ。あの時は驚いたね。一級武器も有象無象の類に見えるほどの武器が、目の前にあったんだから」

「リーダーって周りには優しいよな。こんな上等な物まで用意してもらっちゃってさ」
「俺はそんなのなかったからな。せめて周りの奴には、と思っていただけさ」

事実、俺がSランカーになろうと褒めてくれる奴なんかいなかった。こいつらを除いたら。話が一区切りついたところで周りを見てみると、全員が食い終わっていた。

「それじゃあ、そろそろ行きましょうか」
「はい、そうですね。それでは、お金は――――――」
「俺が払っときますよ。このぐらいの出費全然痛くありませんから」
「でも、やはり依頼主としてここは私が払った方がいいでしょう」
「大丈夫ですよ。リーダーの貯金見たら、たいていの物取りは盗みをやめるレベルだから」
「そうだな。なんせ貯金が億いってるからな。ここの値段はお手頃だし全然痛くないだろ」
「そういうこと。それじゃ、神崎さんを車まで運んどいて。それで白鷹、お前どうするんだ？」

白鷹はとっとと扉を開いて出て行こうとしていた。はっきりとした性格だな。俺が呼びかけると足を止め俺の方に寄ってきた。俺は精算を済ませて歩きながら話をした。

「何がだ？いつもの通りの生活を送るだけだが」
「お前を雇ったのは大金持ちか、相当の家柄の人間なんだろ？普通に考えて、何かしらの圧力が掛かってるとみて間違いない」
「それでも仕方ないだろう。本来、任務に失敗するという事は同時に死を意味しているのだから」
「お前、俺らのチームに入れ。俺に挑んでくるその根性、気に入っ

た。俺らのチームに入れば、それなりの報酬は保証するぜ？なんなら、お前のチームごとはいってもいい」
「……二、三日時間をくれ。こんな話、俺一人で決めるわけにはいかない。生き残ったメンバーと話し合って決める」

白鷹はそう言って自分のバイクに乗って、どこかへ走り去って行った。これで良し。俺は自分の仕事に戻るとしようかな。そう思いつつ、俺は三人の所に駆け足で急いだ。

説教と談話（2）（後書き）

自分が思っているより読んで頂いていた方がいたことにビックリです。ありがとうございます。感謝感激雨あられ状態です。これからもがんばっていきますのでよろしくお願いします！（＞＿＜）／

護衛の終わり

道中は特に問題なく、（太陽が暖かくて眠りかけたのは秘密だ）車に二時間ほど揺られて隣町に到着した。むしろ何の障害もなくて拍子抜けしたぐらいだ。

ホテルの前に到着すると、数名のホテルマンの人が立っていた。まあ、予約ぐらいはしてるよな。俺はその前で車を停めて、助手席の扉を開けた。

「それじゃあ、これで任務は完了って事でいいですか？」

「ええ。ここまでありがとうございました。怪我などはありませんか？」

「あるわけありませんよ。それでは、目的はわかりませんがここでの滞在をお楽しみください」

「……よくわかりましたね。私が日本に住んでるわけじゃないって事」

「うーん、なんていうんでしょう？こう、全体の雰囲気のような物がこの国とは違うっていうのか。まあ、そんな感じです」

「そうなんですか。それじゃあ、はい」

神崎さんは俺に向かって右手を差し出していた。？これはどういう事？外国風に口付けでもしろ、ってことか？いや、違うな。これはひょっとして……。

「こう、ですか？」

「はい」

やっぱり握手か。そう安心して、握手をしたとたん俺（多分神崎さんも）の頭に何かがほとばしった。そして、一瞬だけど神崎さん

から黄金の剣のようなものが見えた。俺たちは同時に手を離し、己の手を見つめていた。あの姿は一体……？

「お嬢様、もうよろしいでしょうか？さすがに九条様もくたびれていらっしゃるでしょうし……」

「……そうですね。それでは爺、彼らに部屋を用意して差し上げて」

「そこまでする必要はありません。言うほど働いてはいませんしね。俺たちはこれで失礼します」

俺がそう言って車の方に戻ろうとすると、あの二人がいらん事を言い始めた。

「ええ、泊まっていきましょうよ。せっかく神崎さんもご厚意なんですし」

「そうですよ。こんな時以外、この町に来たりしませんよ？思い出作りに、ね？」

「ね？じゃねえよ。こういう時は遠慮しとくのが筋ってもんだろ」

「いえ、せっかくですしお願いします。お嬢様の顔を立てると思って」

「……それなら一般客用で三人部屋を一つか、二人部屋を二つお願いします」

「かしこまりました。君達、お嬢様をお部屋にお連れしておいてくれ」

「「「かしこまりました」」」

そういうと、そこには俺たちを除くと誰もいなくなった。俺的にはとっとと帰りたかったんだが。

「そういえばリーダー、この後暇だったら俺の修練の相手して下さいよ」

「え、ずるい！それなら私も、私もしてよリーダー！」

ひとまず、修練ついでにこの調子に乗った二人もシバクとしようかな。

護衛の終わり（後書き）

はい、よくわからないかもしれませんが護衛もなんだかんだで終了。これからだんだんと面白くしていこうと思っていますので、乞うご期待。

修練

そしてホテルの一室に着いた俺たちは、荷物を置くとすぐにフロントで修練用の場所がないかどうか聞きに行った。

「それでしたら、裏庭は素振りぐらいのスペースはありますよ。それでもよろしいでしょう？」

「それでかまいません。ありがとうございました」

俺たちはすぐに、裏庭に歩いて行った。そこには模擬戦闘にもってこいの広さがあった。確かに素振りだけのスペースと言えるだろう。

「それじゃあ、模擬戦を始めるから準備をしとけ。といっても柔軟運動程度だがな。俺は結界を張っておく。周囲に影響を与えないようにな」

「「はーい」」

二人が柔軟運動をしている間に、俺は結界を張るためにぎりぎりの所に四枚の札を張りに動いた。四端にある木に張った。そして札に魔力を流し込み、結界を完成させた。よし、これで終わり。

「これで良し。それじゃあ、そろそろ始めるぞ」

「それで武器はどうするんです？まさか素手でする訳じゃないですよね？」

「当り前だ、武器はこれ。世界樹の枝から作られた剣と槍。これなら存分に振り回せるだろ」

「了解。ところでこれ、どんな結界なんだ？影響を与えないって言ったってどうやって？」

「この部分だけを異界につないだ。つまりいくら振り回してここを傷つけても、現実世界に影響は出ない、というわけだ」

二人に剣と槍を渡して、俺は二本の木刀を構えた。素手による近接戦闘は俺の得意分野だから、ひょっとしたら間違えて二人の武器を破壊してしまうかもしれない。それじゃあ、修練にならない。だから俺は、二番目に得意な双剣を選んだ。

そこから俺たちは修練を始めた。初めは軽めに、だけどだんだんと激しく動き始めた。周囲には俺たちの掛け声と、ぶつかり合う音が鳴り響いた。

「どうした！？動きが鈍ってきてるぞ！もう疲れたとか言ってくれるなよ？」

「当り前だろ。天心流剣術――――崩天黒刃！」

卓也は一本の剣で同時に三連撃を叩きこんできた。その剣撃を俺は全ていなし、容赦なく手首に一撃を叩きこんだ。

「隙が多すぎるぞ！次、来い月花！」

「分かってるよ！北竜葬送流槍術――――葬竜演武！」

槍頭と石突きの両方で俺にぶつけようとしたが、双剣を石突きの時にぶつけて体勢を崩した後、卓也と同じく手首に容赦なく叩きこみ武器を落とさせた。

「ほい、これで終わり。あのな、お前らそんな隙が多い技を使わなくてもいいんだよ。これが模擬戦だったからいいけど、もし実戦だったらお前らが攻撃を当てられてたのは手首じゃなくて頭か、体だ。いつでも隙は少ない方が良い。まあ、わざと隙を見せて挑発するって手段もあるけどお前らにはまだ早い」

「「はーい、わかりましたよ」」
「そうふてくされるな。前にやった時よりは技の連度も実力もはるかに上がってる。そう悲嘆に暮れることはない。ま、今のまんまじゃ俺から一本取るのには相当時間がかかるがな」

そんな事を話していると、突然俺が敷いた結界が壊れた。何事かと思ってそちらの方を向いてみると、そこには神崎さんが立っていた。

修練（後書き）

続けて書いてみました。いや、面白くなったと思うので楽しんでください。

では、また。（＞＿＜）／

EX・神崎視点

乾さんたちと別れた後、私こと神崎真由美は最上階のＶＩＰ専用ルームでくつろいでいた。今回私が日本に来た理由は、婚約者である九条泰斗さんと会うためだ。だけど、九条さんはとある事情でいま仕事に出ているのでここに到着するのは二、三日後になるらしい。

「それにしてもあの時のは一体……？」

乾さんと握手した時、乾さんに一瞬、それもぼんやりとだけど白銀の色の狼が見えた。おそらくあれが神喰狼（フェンリル）なんだろう。でも私に反応したって事は彼は――――――

「お嬢様、よろしいですかな？」

「ええ、構わないわよ。それでどうかしたの？ギルフォード」

「彼らの動向を確認してきました。彼らは今、ホテルの裏庭のスペースで模擬戦をしているようです。詳細はわかりませんが」

「ありがとう。それにしても分からないってどういう事？」

「結界を張ったようでして、その向こうが見えないのです。しかも、その結界も相当な強度を持っておりまして。気づかれずに突破するのは不可能と思い、戻ってきた次第です」

「どれだけの魔力を保持しているのでしょう？

ギルフォードの力を持ってしても、気づかれずに突破するのは無理と思わせるなんて」

「それはわかりかねますが。それよりもお嬢様」

「ん？何か言いたいことでもあるの？」

「はい。お嬢様は何故、彼にそこまで興味を示されるのですか？

確かにあの若さでＳランカーというのは珍しいですが、全くいないわけではございません。

それはお嬢様でもわかってらっしゃるでしょう。それなのに、なぜ？」

それは当り前の疑問でしょう。おそらく彼は私と同じ純血種。そうであるが故に、あのような光景を見せたのだろう。

「ギルフォード、私は神話や伝説の武器へとその姿を変える事ができるサルジストの純血種。
そしてここからは私の想像になりますけど、彼は、乾さんはおそらくサルジストの力をふるう事が出来るクラストの純血種です。その証拠に、彼は私の持つ力に反応した」
「なんと。まだ生き残っていたのですか？
それでは彼は、最後のクラストの純血種ということになりますが……」

そう。私のようにサルジストはまだ少ないけれど現存している。けれどクラストはサルジストなどと交りあうことで、その血の純血がいなくなった。純血種がこの三十年以上発見されなかったことで、クラストの純血種は絶えたのだと思っていた。でも、そうではなかった。

「それで彼らは、ホテルの裏庭にいるのね？」
「はい、そうですが……まさか彼らの所に行く気ですか？」
「そうよ。どうせこのまま待っていても暇だしね。どうせに、三日は来られないのだし」
「わかりました、が。行く前にその格好と髪をどうにかして下さい。乱れ過ぎです」

私はギルフォードの言うとおり髪を梳いて、服のしわを元に戻して裏庭に行くと、そこにはギルフォードが言っていた通り巨大な結

界が張ってあった。
その結界に指が触れると、途端に結界は壊れて驚いた表情で立っている三人がいた。あれ？

ＥＸ．神崎視点（後書き）

ギルフォードというのは、あの執事の事です。ついに１０００ＰＶ突破！

やったぜ、Ｖ！それじゃあ、また今度！バイバイ！（＞＿＜）／

喫茶店にて

ホテルにある喫茶店で俺たちは談笑していた。
結界を破壊された時は驚いたが、それは彼女の手に聖属性が混じっていたせいだった。俺がこの周辺に張った結界は闇属性。異なる属性の力に反発し、耐えきれなくなり壊れてしまったんだろう。
それでも、長時間触れていて砕けたならまだしも、彼女の顔を見るにあれはただ触れてしまっただけで壊れたという感じだ。どれだけ内包量と密度が高いんだよ。
もしかしたら、さっき来てた執事さんが何かしたのかもしれないけど……。

「それで、神崎さん。どうしてあんな所に？」
「え！？えーと、相手が来てなくて散歩をしてたんですけど……」
「要するに、暇だったんでしょ？」
「……はい。その通りです」

着いたはいいけど、相手が来ていなくて散歩してたら偶然ここに着いた、か。いや、違うな。彼女は俺の事を探っている感じがする。暇はその通りなんだろうけど、こちらの事も探ろうって感じか？
まどろっこしいのも嫌だし、ここはもういっそ単刀直入に言っとくか。

「それで？神崎さん、俺に何か用があるんじゃないんですか？わざわざ執事さんを俺にけしかけるぐらいなんですから」
「……気づいてらっしゃったんですか？あれでもギルバートは元Ｓ＋ランカーの実力者なんですよ？」
「それが何です？そんなことはどうでもいいんです。
大事なことは、貴方が俺にどんな用があるのか、という事なんです

から」
「……では率直にお伺いします。あなたはクラスト最後の純血種なんですか？」
……やっぱりその話か。結構うんざりするな。爺たちがこの情報は隠蔽してるけど、やっぱり純血種にはわかるのかな？
「その答えはイエスとノーの両方。確かに男でクラストの純血を継いでいるのは俺一人だ。
だが、人間の純血種が俺一人か、と訊くとそれは違う。俺には一応だが、姉と妹がいるからな」
「一応？どうして一応なんですか？」
「……姉貴はどこ行ってるのかもわからない。その上生存不明だし。妹に至っては、もう俺と同じ乾姓を名乗っていない。千葉家の養子ということになってるからな」
「数字持ち（ナンバーズ）。それも番外（エクストラ）ですか」
「そうだよ。俺が爺たちと相談してそうしてもらったんだ。俺はまだしも、あいつはまだ未熟。
俺の傍にいて狙われるよりは被保護者としては格式も高い数字持ち（ナンバーズ）、それも番外（エクストラ）の方が良い」
数字持ち（ナンバーズ）とは、名字の方に一から十の数字を持つ者たちの事だ。一桁の者はファースト二桁の者はセカンド、三桁の者はサードそしてそれ以上が番外、つまりエクストラとつけられる。
噂だけのレベルだが、番外の番外つまりオリジナルエクストラである零の位を持っている者がいるそうだという物もある。面倒すぎるぞ、この制度。誰が考えたんだよ。
「それは総局長の娘であるあなたが気にすることじゃないでしょう？」

「どうしてそんな事をあなたが知っているのです？」
「否定になっていませんよ。それは俺があなたの父である、神崎宏隆総局長と知り合いだから。何回かあなたのお話は聞いていますよ」
「……お父様はなんと仰っておられたんですか？」
「誰にでも気がきいて、そして優しい自分にはもったいない娘だと。でもただ一言、構えないのが残念だと。自分は仕事にかまけてあなたに構ってあげられなかったのが、残念だと言っていましたよ」
「そうですか。お父様はそんな風に……」
神崎さんは静かに声も出さずに涙を流していた。俺たちはそれを静かに眺めていた。

喫茶店にて（後書き）

はい、今日は土曜なので昼から投稿してみました。ここ最近は説明ばかりですが、そのうち派手なバトルも入れていこうと思いますのでよろしくお願いします。

それではまた後で。あるいはまた今度。さいなら～。＼（＞＿＜）／

模擬戦の前に

「それでどうしてこんな流れになるんですか？」

あの後、ひとしきり泣いた神崎さんは唐突に、稽古をつけてくれませんか？と言ってきた。そしていきなりさっきの裏庭まで引っ張り込まれた。卓也と月花もちゃっかりついてきていた。

「私、強くなりたいんです。今回みたいに誰かに頼るだけでなく、自分の身ぐらいは自分で守れるように」

「別にそんな事をする必要はないと思いますけど。人には向き不向きという物がありますし」

「それでも、力は持っていた方が良いでしょう？いざという時のために」

「否定はしませんけどね。こういうこともありますし」

俺が足を地面に叩きつけるのと同時、ナイフが飛んできた。だがそれは、俺の足元の影から出てきた者によって阻まれ、俺は手に籠手を纏わせて飛んできた方向の木を殴った。それによって生じた衝撃波で何本か先の枝に足をつけていた男は落ちてきた。

「ばれたかからってナイフ投げなくたっていいじゃないですか。えーっと確か、ギルフォードさんでしたっけ？」

「……分かっておられたのですか？私がいたことを」

「もちろん、貴方の気配を立つ能力は素晴らしいの一言に尽きます。ですが、視線が強すぎます。

あれでは方向はわからないでしょうが、監視されているのがばればれです。

それと魔力の動向ぐらい気をつけましょう。俺が即時結界で大体半

径五百メートル程度の探査術式を使ったのにも気づかれていないようでしたし」
「「半径五百メートル！？」」

あれ？そんな驚かれるような事だっけ？……あ、そうだった。普通の術者でも即時結界の探査術って半径二、三十メートル位だっけ。いやあ、完全に忘れてた。

「直径一キロの即時結界なんて一花（いちはな）様だけの技だと思ってたのに、他の人にも出来たんだ」
「あんな超人と一緒にしないでください。あの人は訓練もせずに大規模攻撃魔術の展開までできたんですよ？しかも六歳で。いくらオーディンの魂を宿してるからってチートすぎますよ」
「チート云々はリーダーにだけは言われたくないけどね」

ええい、やかましいわ。一花とは一桁数字（ファーストナンバー）のトップだ。オーディンの魂を宿している魔術界の女帝。そして世界でも有数の実力者。SSSランカーだからな。ちなみにSSSランカーは世界でも三人しかいない。『一花（いちはな）』・『二木（ふたき）』・『三柱（みはしら）』この三人だけだ。もうやばい。この三人が先頭に出るというだけで、もう絶望しか残らないらしい。いわば、最終兵器ってところかな。

「とにかく。いくら元とはいえ、こんな失態を犯してはいけないという事を言いたいんですよ。俺は」
「そうですね、わかりました。あなたもSランカーとは思えませんが」
「それはもういいです。それじゃあ、始めようか神崎さん」
「はい、お願いします。私の事は真由美って呼んでくれませんか？」
「それじゃあ、真由美さんで。参ります」

俺は日本の木刀を構え、真由美さんはレイピアのような形をした木刀を構えた。そうして同時に飛び出した。

模擬戦の前に（後書き）

はい、同日連続投稿です。できればこのまま一、二話書きたいと思います。もう大奮発だー。というわけで楽しんでいって下さい。

模擬試合

同時に動いた俺たちだったが、先に機先を制したのは真由美さんだった。もう何がすごいって、その突撃力と剣捌きだね。一瞬で俺の懐に入って、俺の鳩尾の部分を本気で突こうとしてきたし。殺す気かっての。ま、全部弾いたんだけど。

「護衛されてる時から感じてましたけど、さすがに強すぎじゃありません！？開幕の連撃を全部弾くなんて！」

「そりゃこっちのセリフ。なんでこんだけの実力があるのに護衛なんかいるんだよ？」

「それは……私が魔術を使えないからで……」

「……」

なんじゃそりゃ。サルジストの純血種なのに魔術が使えないってどうよ？もしかして聖属性も自発的に使ってるわけじゃなくて、垂れ流し状態なのか？どんだけ内包量がとんでもないんだ？

魔術などの知識が世界的に知られることとなった現代において、魔術を使えない人というのは絶滅危惧種並みに稀少だ。火をつける魔法とかで使用されることもある。まあ、そのせいで犯罪も増えてるんだけど。

「初歩の初歩、火の術は使えますよね？」

「それが全然だめで……なんでできないのか分からないって先生に呆れられたぐらい」

「まあ、いいか。今は関係ないし。それで剣をより磨くと。それなら、もっとアクセルを上げた方が良いですかね？」

「そうですね。お願いします。手加減は抜きで」

「言いましたね？後悔しないでくださいよ？月並みなセリフではあ

りますが」

俺は体の中心に小さな炎をイメージした。これが普段の俺だ。そしてその炎の火力を段々と上げていく。そんな俺の気配をあやしく思ったのか、真由美さんはレイピアを構え猛攻を仕掛けてきた。

両腕、両足、右肩、脇腹、肋骨の部分。とてつもない嵐のような猛攻、だが一発一発の威力は小さく大したダメージにはならないが量が量だ。じりじりと溜まっていく。

そんな猛攻に耐えながら、炎をイメージし続けた。そしてそれが頂点に達した時、一気に爆発させた。それは俺の体の隅々まで肉体強化の術を掛ける物だ。これによって俺の身体能力は格段に上がる。普段の五倍ほどに。

いきなり俺の姿が消えたことに驚いたのだろう。真由美さんは周りを見回していた。さっき身体能力が上がると言ったが、俺が上げたのは脚力と感覚神経。それによって俺は今――――空中にいた。

いやあ、我ながら跳びすぎた。久しぶりすぎて加減が難しいな。神崎さんの五メートルほど後ろに着地すると、神崎は驚きながら振り返った。

「いったい何をしてたんですか？」

「ちょっとした術を体にかけてた。時間かかるからね、あれ。それじゃあ改めて、始めよう」

俺は強化された脚力で真由美さんに双剣で居合抜きをした。それを真由美さんはすんでのところで回避した。鋭いな。攻守は完全に逆転した。俺の文字通り嵐のような猛攻に、真由美さんは回避することで事なきを得ていた。俺の剣は真由美さんと違って重い。そんな物を連発されていたら相手としては、やっていられないだろう。

それでも何とかこちらの動きをつかみ、鳩尾を中心とし星の形で突きの五連発を浴びせてきた。そして鳩尾に掌底を食らわしてきた。

それは魔物用の魔術だった。星の加護を使い聖属性の掌底で相手の急所を突く。とんでもない技だ。
その技を放ったことで固まった真由美さんを魔力で吹き飛ばし、一本の剣を両手持ちにして大上段で斬りつけた。すると真由美さんの持っていた木刀が半ばで粉々に砕け散った。

「そこまで！勝負あり！」

月花の声が響きわたり、俺たちの模擬試合は終わった。ああ、体中が痛えなあ。

模擬試合（後書き）

はい連続投稿第三段！できたぜ！読んでくれる方も増えてうれしいです！

バンザーイ！というわけで次話でまたお会いしましょう！では！

模擬戦の後

模擬戦も終わり、俺たちはなぜか最上階の真由美さんの部屋に招かれていた。……何故？

「申し訳ない。お嬢様も手加減を挑みにかかるのですから。これだけの傷を負う者も珍しいだろう言うぐらいの傷を負ってますよ」

「なんかいろんな所が痛いですから。肋骨が一本ぐらい折れてるか、ひびが入ってますね、これ」

「うっ！……すいません。ちょっと暑くなりすぎてしまって……」

「それはもういいですよ。あなたの強さもよくわかりましたし。あなたの剣筋は我流にしては洗練されているが、流派にしては粗すぎる。あなたの剣はあなた自身が作り上げた物なんでしょう？」

「はい。向こうでは趣味としてレイピアを習っていたんですが、学んでいく内に自分で技を作り上げてみたい、と思うようになったんです。それのほぼ全てをあなたにぶつけてみました。どうでしたか？」

「確かに強い。ですがやはり魔術が使えないというのはまずすぎます。おそらくあなたが魔術を使えないのは、無意識の内に魔力を聖属性に変換して垂れ流しているからです。だから必要な魔力が足りないんです」

「へ？私の魔力って垂れ流しの状態なんですか？」

「ええ。無意識下で行われてるせいで気づかないんでしょうね。そうですね……水門をイメージして下さい。魔力の運用というのは全てイメージで賄われていますから。次に垂れ流しの状態になっているそれを閉めて水を止めるイメージをして下さい。……はい、オッケーです。垂れ流しは止まってます」

「これで魔力が溜まっていくんですか？」

「そうですね。でも、そうそう全快になることはあり得ない。回復

が早い人でもそうですね、大体三日程度かかります。あ、これはフェンリル所属の魔術師の基準ですから。
まあ全体量がわからないと、どうしようもないんですけどね？真由美さんは魔力の内包量とその回復速度は一線を介していると思いますけどね」

彼女は魔力をほぼ垂れ流し状態で過ごしているのにも拘らず、普通に生活している。魔力が枯渇すると、吐き気や嘔吐感に襲われる物だから彼女の魔力総量は計り知れない。
やっぱり純血種としての力が作用しているのかな？俺もフェンリル所属の魔術師の大体二十倍ぐらいあるって言われたし。

「それじゃあ、俺たちはこの辺で戻らせてもらいますね。卓也、月花行くぞ」
「「ういーす。了解」」
「え！？まだ傷は治りきっていませんよ！？」
「大丈夫ですよ。俺の力は少々特殊ですから。それでは失礼します」

俺達は真由美さんの部屋を出た後、卓也と月花は夕食を食べに行くと言っていたが、俺は辞退しては部屋に戻りベッドにぶっ倒れた。

今回の特務は色々あったな。まさかサルジストの純血種と会うことになるとは。ま、なんにせよめちゃくちゃ眠い。さっさと……寝ると……しよう……。そして俺は眠りについた。

模擬戦の後（後書き）

連続投稿第四段！残念ながらもう日は超えてしまったが大丈夫！まだぎりぎりセーフだ！それじゃ、また今度！（＞＿＜）／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3483y/

白銀の鎧と黄金の剣

2011年11月20日08時16分発行